

# 1. 京田辺市田辺遺跡の古代墳墓

溝口 泰久・井川 瑞季

## 1. はじめに

京田辺市田辺遺跡（図1）は古くから土器散布地として周知されていたが、1983年から1984年にかけて実施された田辺町庁舎（現京田辺市役所）および体育館等の建設に先立つ発掘調査において多様な遺構が確認されている（田辺町教育委員会1984 a・b）。古墳出現期には、加飾二重口縁壺や鉄剣を伴う木棺墓が存在する（池田2023）。古墳時代前期末から中期前半頃の円筒棺が出土し（小林2023）、後期には竪穴建物が確認されており、集落域が展開していた時期も想定しうる。奈良時代から平安時代にかけては火葬墓の存在を示唆する緑釉四足壺や土壙墓が存在するなど特殊な土地利用がうかがわれ、同時期において遺構が密に展開する興戸遺跡などの周辺遺跡との関係性も注目される。中世には田辺城が築城され田辺氏の拠点とされている。また、近世以降の瓦窯跡も検出されており、長期間にわたる土地利用が認められる複合遺跡である。

筆者らは京田辺市史編纂事業の一環で田辺遺跡における発掘調査の記録ならびに出土品を実見する機会を得た。本稿では古代墳墓に関する調査成果を報告する。

## 2. 遺構

1984年度調査において蔵骨器や土壙墓が検出された調査区（図2、写真1）では、直接的に墳墓の存在を示唆する遺構のほかにも古代の遺構が認められる。本報告では田辺遺跡における古代の墓域としての性格を理解する一助とするため、墳墓でない遺構についても触れたい。なお、遺構番号については調査当時のものを踏襲する。

S K 07 緑釉四足壺が出土したという埋土に炭化物を含む0.8 m四方の土坑である。緑釉四足壺片がまともに出てきた地点（写真2）において、その破片の取り上げ後に平面を精査したところS K 07が検出されたという。遺構埋土内には須恵

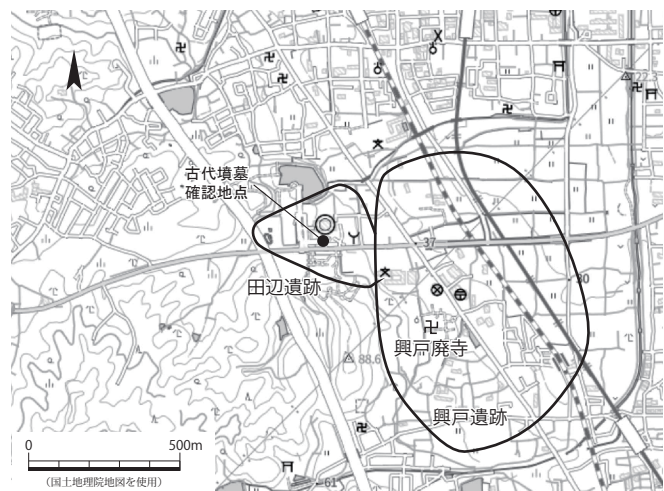


図1 田辺遺跡周辺地図（S = 1/2500）

器甕片や土師器甕片があり、和同開珎（708年初鑄）1枚が共伴していた。また、S K 07の上面、あるいは埋土内からは「比佐豆」と墨書された須恵器杯Aが発見されたようである。緑釉四足壺取り上げ以前にはS K 07は検出されておらず、緑釉四足壺がS K 07と確実に結びつく遺物であるとは断言できない。緑釉四足壺が完形ではなく破損した状態で出土し、欠損部が多いことも考慮すると、四足壺が埋納されていた遺構は削平を受けており、火葬墓そのものはほとんど失われてしまっていると解釈するのが合理的だろう。和同開珎が出土していることから、S K 07自体は奈良時代以降に帰属するとみられ、この緑釉四足壺は平安時代以降の遺物であることは確実であるため、層序的にも問題はない。

S X 08 炭化物を含む埋土が浅く堆積した0.9 m四方をはかる遺構である（図3、写真3）。遺構上面にて黒色土器と土師器、承和昌宝（835年初鑄）14枚が集積した状況が認められている。土師皿（図5-2）は正位、黒色土器碗（図5-3）は逆位の状況で出土した。平安時代の墓とされているが（田辺町教育委員会 1984 a）、火葬墓を連想させるような炭化物混じりの埋土を伴いながらも出土遺物は供膳具であり蔵骨器となりうるような器種は出土していないため墳墓遺構とは断定できない。ただし、呪術性の指摘される銭貨が共伴している点を考慮すると、何らかの儀礼的な性格をもつ遺構の可能性はある。1種に限られた複数枚の銭貨と土器の共伴事例であることから、土器の実年代を考える上でも重要な事例である。

S X 09 長辺1.6 m、短辺0.4～0.6 mをはかる土壙墓である（図4、写真4）。検出面から遺構の底まで深さ約0.25 m程度残存していた。北西―南東に主軸をもつ。墓壙の中心には暗灰色から紫黒色を呈する部分があり、その範囲で人骨片が検出されている。墓壙底には北端部にピット状の落込みがある。墓壙内からは灰釉陶器碗と内黒黒色土器碗が1点ずつ出土しており、いずれも完形である。これら遺物は、墓壙の検出面近くで横倒しのような状況で出土しており、その原因を木棺の腐朽による埋土の流動によるものとすれば、S X 09は木棺墓であった可能性がある。

灰釉陶器壺出土土坑 埋土に炭化物を含む土坑である。灰釉陶器の壺が1点出土した。調査の記録を確認する限りでは遺構番号は見受けられなかった。

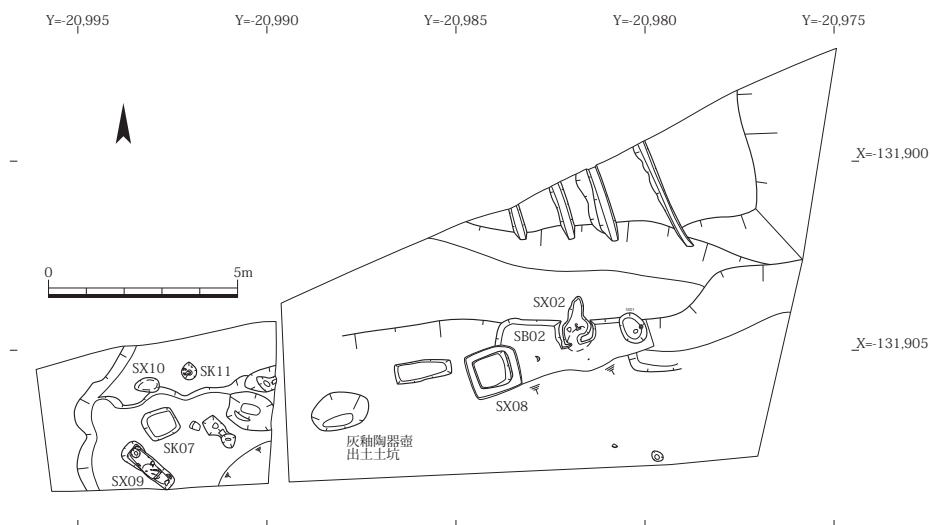


図2 古代墳墓検出調査区平面図（日本測地系）（S = 1/200）

### 3. 出土遺物

**S K 07 上層遺物** 1は緑釉四足壺である。正確にはS K 07の上面からの出土のため、遺構出土遺物と断言できない。4割程度の遺存に留まるが、石膏により全形が復元されている。実測にあたって各部位を計測しているが、復元による影響として数値に歪みがある可能性が否めない。特に、類例と比較して口径が小さく、誤った復元がなされている可能性が高い。体部には横方向に三条の突帯がめぐり、その上から四本の脚が取り付けられている。突帯は断面M字状で、体部の貼り付け位置には目印としてあらかじめ沈線が刻まれている。脚は体部の頂部付近から貼り付けられているが、底部方向に向かって厚みを増しており、地に接する部位は外反して踏ん張る形状となる。釉は外面全体に施され淡い緑に発色するが、内面は素地のままで白色を呈する。胎土は密、焼成はやや軟質で軟陶気味であるが、類例から東海産であると考えられる。

緑釉四足壺のこのような形態は唐の越磁四足壺に由来しているが、越磁四足壺が小型であるのに対して日本の四足壺は大型化し蔵骨器としての利用が中心となる（齋藤 2000）。この器種は発掘調査による出土事例が少ないため詳細な年代的位置づけが難しいが参考となる事例を挙げておく。まず、高野山金剛峯寺真然堂における発掘調査では、基壇下層から金剛峯寺二世として空海の跡を継いだ真然（891年没）の蔵骨器と推測される緑釉四足壺が出土しており、製作年代は9世紀後半とみられている（真然大徳記念出版編纂委員会 1990）。真然堂出土四足壺は体部に横方向の突帯がめぐっておらず、大型ではあるが越磁四足壺を忠実に模倣した形態であるといえ、田辺遺跡出土例より型式学的に先行する。また、平安宮醫院の一角にて出土した緑釉四足壺は3条の突帯がめぐる球形の資料で田辺遺跡出土四足壺と非常によく似ており、共伴する土器から廃棄年代は9世紀末から10世紀初めとされている（松吉 2023）。これらの事例から、田辺遺跡出土緑釉四足壺は9世紀後半を生産年代の上限とし、10世紀前半頃までには蔵骨器として火葬墓に供されたと考えられる。

**S X 08 出土遺物** 2は土師器である。注記がなかったため他地点出土品の可能性を排

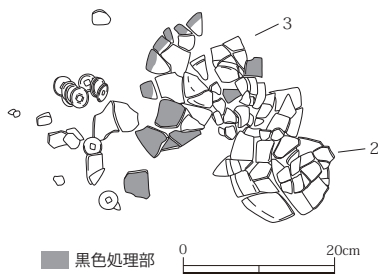


図3 S X 08 平面図 (S = 1/10)

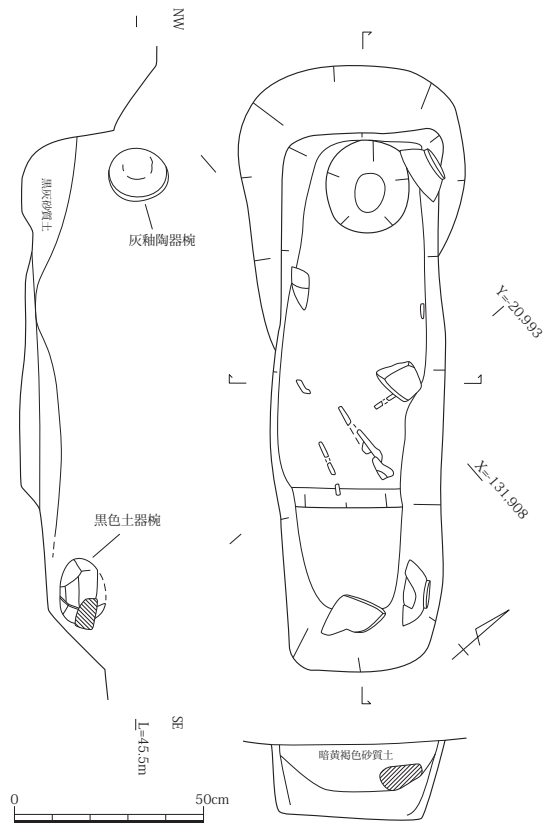
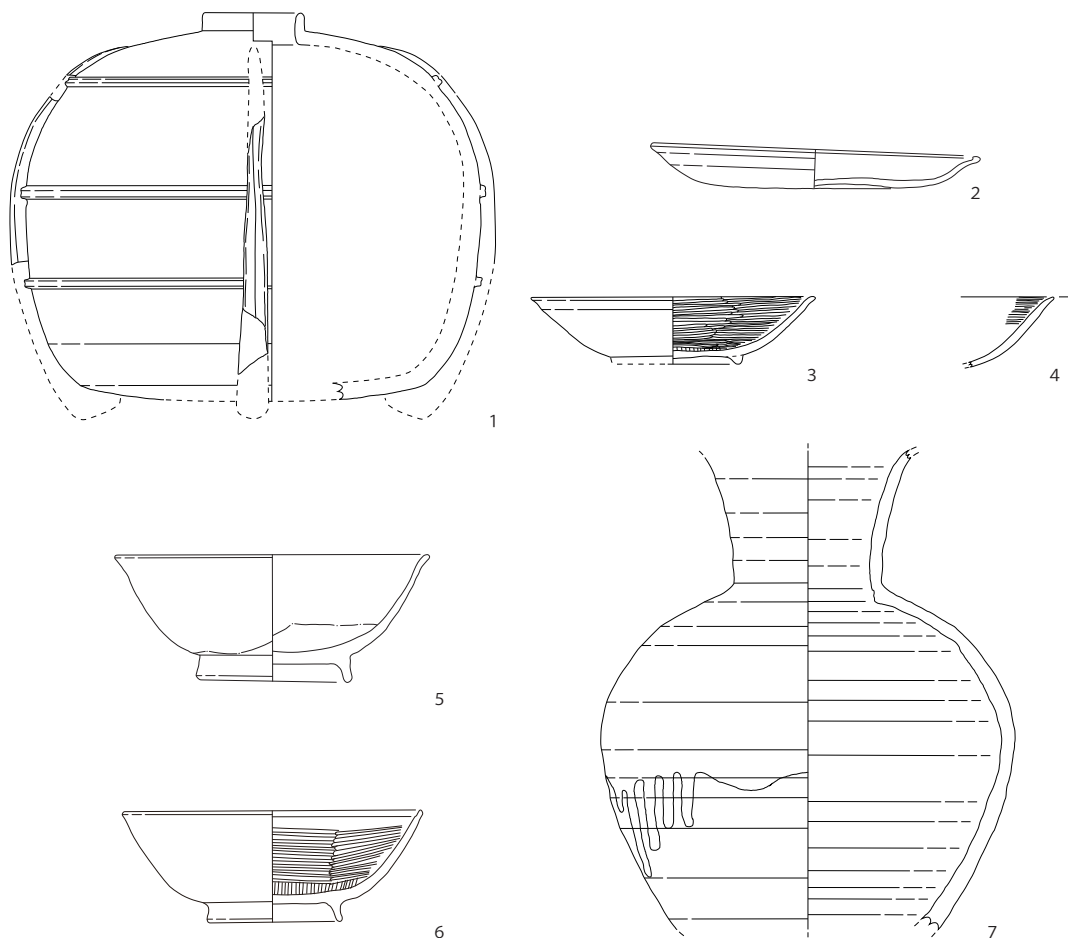


図4 S X 09 平面・断面図 (S = 1/20)

除しきれないが出土状況写真から S X 08 出土品と判断した。口径 17.4cm、高さ 2.0cm をはかる。体部は外反し口縁部は内面側に屈曲する。底部外面はケズリ調整されている。平尾政幸編年の 2A～2B 期のもので 9 世紀半ばから 9 世紀後半に位置づけられる（平尾 2019）。同一遺構から土師器はもう 1 点出土していたようだが確認できていない。3、4 は内黒の黒色土器碗である。3 は口径 14.9cm、高さ 3.6cm をはかる。口縁部は外反し、貼り付け高台である。内面には暗文が施されている。施釉陶器に影響を受けた器種とみられ、9 世紀半ばから後半頃のものともみられる（森 1990）。4 は小片のため法量不明だが 3 と同様の碗と考えられる。これらの遺物は 14 枚の承和昌宝（835 年初鑄）と共伴している。

S X 09 出土遺物 5 は灰釉陶器の碗である。完形で出土した。口径 16.6cm、高さ 6.7cm をはかる。釉はハケ塗りされており、底部内面の見込みと外面の高台付近は釉が塗られていない。いわゆる深碗であり三日月高台の退化した様相が看取されることから、その時期は 10 世紀後半に位置づけられる（尾野 2006）。6 は内黒の黒色土器の碗である。こちらも完形で出土した。口径 15.7cm、高さ 5.9cm をはかる。内面には暗文が施されている。この器種は高い高台を有しており、灰釉陶器などの深碗器種に影響を受けたものと考えられることから 10 世紀半ばから後半に位置づけられている（森 1990）。



1 : S K07 上層 2～4 : S X08 5・6 : S X09 7 : 灰釉陶器出土土坑

図5 出土遺物 (S = 1/4)

灰釉陶器出土土坑 7は灰釉陶器の壺である。最大径21.9cmをはかる。体部と頸部が残存しており、口縁部形態や高台の有無は不明である。内面には体部と頸部の接合痕が明瞭に観察される。

#### 4. まとめ

田辺遺跡で検出されている古代墳墓、あるいは古代墳墓の存在を示すものに、S X 09と蔵骨器としてのS K 07上層出土緑釉四足壺を挙げることができる。S X 09は出土した土器の年代から10世紀後半頃の土壙墓と推測され、緑釉四足壺を蔵骨器として用いた火葬墓は10世紀前半頃までには位置づけられる。それぞれ10世紀代を中心とする近接した時期のものだが、前者は土葬、後者は火葬という異なる葬法によった墳墓が隣接していることになる。黒崎直は奈良時代以降の古代墳墓のあり方として、火葬墓の盛行した第1段階（8世紀）から土葬への回帰が認められる第2段階（8世紀末から9世紀前半）へと移行し、薄葬を基調として火葬と土葬の混在する第3段階（9世紀後半以降）へ、という変遷を天皇葬送の変化に起因するものと提示している（黒崎1980）。また、渡邊邦雄は黒崎の枠組みを踏襲しつつ、火葬墓と土葬墓を副葬品から比較した上で、両者を異なる理念に基づくものとみて、土葬による木棺墓を政治性の強い墓制と指摘している（渡邊2001）。今回紹介した田辺遺跡の古代墳墓の様相は、黒崎の第3段階と合致し、火葬と土葬の変遷過程を考究する上で重要な遺跡であるといえる。S X 08のような特殊な遺構も近接して検出されていることは注目され、特にその時期は9世紀半ばまで遡りうることから、古代において一帯が墓域のような特殊な性格をもった場として長期にわたり利用されていたものと推測される。

田辺遺跡は綴喜郡衙と推定されている興戸遺跡と隣接していることが注目される。興戸遺跡では通常の集落遺跡ではほとんど出土しない施釉陶器が出土し（京田辺市教育委員会1998）、奈良時代から平安時代にかけて綴喜郡の重要地域であったことは確実である。田辺遺跡における古代墳墓の被葬者は、興戸遺跡周辺に基盤を有した者であったと考えるのが妥当であろう。また、官人と結びつくような遺物が発見されていないため、被葬者の官職等を推し量ることはできないものの、緑釉四足壺が出土していることは重要である。緑釉四足壺を蔵骨器とした被葬者として明らかなのは先述した真然である。このような高僧と同等の蔵骨器を採用した被葬者はやはり高位の人物であった可能性が高いだろう。

以上のような古代墳墓が確認されている田辺遺跡は京田辺市における古代史を読み解く上で非常に重要な遺跡と認識することができる。やや位置的には離れるが興戸遺跡では11世紀後半の和鏡が出土し、やはり墳墓に伴うものとみられ（田辺町教育委員会1996）、周囲が墓域として広範に利用されていた可能性もある。田辺遺跡はいまだ報告書が刊行されておらず実態については不明な点も多いが、本稿で明らかとなった古代墳墓をふまえた上で、改めて周辺遺跡に目を向けていく必要があるだろう。

#### 参考文献

池田野々花 2023「京田辺市田辺遺跡の古墳出現期木棺墓」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』  
第9号 京都府立大学文学部歴史学科

尾野善裕 2006 「古代土器の編年と年代観—10・11世紀を中心に—」『第14回京都府埋蔵文化財研究会発表資料』京都府埋蔵文化財研究会

京田辺市教育委員会 1998『興戸遺跡第13次・第14次発掘調査概報』(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第25集)

黒崎 直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所

小林 楓 2023 「京田辺市田辺遺跡の円筒棺」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号  
京都府立大学文学部歴史学科

斎藤孝正 2000 『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』(日本の美術 第409号) 至文堂

真然大徳記念出版編纂委員会 1990 『高野山二世伝灯国師真然大徳伝』高野山二世伝灯国師真然大徳千百年御遠忌大法会事務局

田辺町教育委員会 1984a 『田辺遺跡現地説明会資料』

田辺町教育委員会 1984b 『田辺城・田辺遺跡現地説明会資料』

田辺町教育委員会 1996 『興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報』(田辺町埋蔵文化財調査報告書第19集)

平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』第12号 京都市埋蔵文化財研究所

松吉祐希 2023 『平安宮跡主水司跡・醫院、二条城北遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-5)  
(公財)京都市埋蔵文化財研究所

森 隆 1990 「西日本の黒色土器生産(上)」『考古学研究』第37巻2号 考古学研究会

森 隆 1990 「西日本の黒色土器生産(中)」『考古学研究』第37巻3号 考古学研究会

森 隆 1990 「西日本の黒色土器生産(下)」『考古学研究』第37巻4号 考古学研究会

渡邊邦雄 2001 「律令体制における土葬と火葬」『古代学研究』154号 古代学研究会

山田邦和 1996 「京都の都市空間と葬地」『日本史研究』第409号 日本史研究会



写真1 墳墓検出調査区周辺(北西から)



写真2 緑釉四足壺出土状況



写真3 S X 08 検出状況(西から)



写真4 S X 09 完掘状況(北東から)